九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

なぜ「からかい」として認識可能になるのか：「じゃ」で始まる確認要求の発話に着目して

呉，青青
九州大学大学院地球社会統合科学府 ： 博士後期課程３年

松村，瑞子
九州大学大学院言語文化研究院 ： 教授

https://doi.org/10.15017/1959057

出版情報：言語文化論究. 41, pp.17-31, 2018-10-22. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

なぜ「からかい」として認識可能になるのか
――「じゃ」で始まる確認要求の発話に着目して――

呉　青青[1]・松村　瑞子

1　はじめに

私達は言葉や身ぶりを用い、他者とのやりとりを行うことにより、日々の社会生活を成り立たせている。例えば、言葉を用いることで、廊下で知り合いと挨拶したり、教室で教師に質問したり、職場で上司に仕事を報告したり、といった様々な社会的行為を達成している。もちろん、「これらの社会的行為の達成される要因は言葉のみに帰せられるものではなく、状況次第では言葉が一切用いられずに達成される場合もあるだろう。しかしながら、言葉が用いられることで、用いられなかった場合に比べてはるかにきめ細かく調整された形での行為の達成が可能になることは疑いようもない」（横森 2013：1）。すなわち、言葉で組み合わせられている発話が用いられ、ある社会的行為が達成されると言えるだろう。ここで、やりとりの中のある発話はなぜある行為として認識可能になるのか、という問題が出てくる。串田・平本・林（2017：30-36）が述べるように、認識可能な行為の構成は、「状況と行為のたえまない彫琢」[2]「位置と組み立て（“Why that now?”）」[3]「証拠としての相手の反応」という 3 つの面を考慮しなければならない。

親しい友人の間でからかったりからかわれたりすることは日常生活でしばしば行われることである。ある行為が友人に「からかい」だと認識可能になるとき、「からかいでありうるもの（possible teasing）」もしくは「認識可能なからかい（recognizable teasing）」が含まれている。ある発話が何の行為として認識可能になるのかということは、まず会話参与者自身にとっての問題である。もし会話参与者がある発話をある行為として認識し、そして適切に反応するなら、我々（分析者）も「社会の一員として身に付けている常識に基づいて、この状況ならこの社会の成員にとってこういう行為に見える」（串田・平本・林 2017：35）という、その発話の「常識合理性」（串田・平本・林 2017：35）を記述することができる。一方、分析者の常識が、会話参与者たちにも当てはまるという証拠としてもっとも基本的なものは、会話の相手が実際にその発話をどう認識したのかである（串田・平本・林 2017：36）。

また、ある発話があるタイプの行為を遂行するという考え方（言語行為論）では、「調査データを使わず、作例を作ってその形式的特徴（典型的には統語的特徴）から人間行為の理解可能性を導き出す」（平本 2015：240）。しかし、「作例の分析が抱える問題の一つは、人間行為のカテゴリーを研究者の側が定めるしかないことである。実際の人間行為の種類は、単純なカテゴリーに収まりきらない可能性がある」（平本 2015：240）。これに対して、会話分析（Conversation Analysis, CA）は、「特定の具体的状況における特定の発話が、ある行為を遂行していると理解できる、という常識的観察から出発する。そして、その発話がいかにしてその状況のもとでそのように認識可能になるのかを、あくまでも具体的データの観察を通じて、組み立てや位置に注目して記述する」（串田・平本・

林 2017：37)。そして、社会的行為の認識可能性を記述するためには、「その場面の一度きりの観察ではなく、録画・録音データの詳細（沈黙の秒数、重複の開始時点と終了時点、音の伸張などの振る舞いの形式上の性質）に気を配りながら繰り返し検討する必要がある」（平本 2015：241)。

会話の中で、「話し手が話題や相手の発話に対し、自己の理解や認識が正しいかどうかの確認を相手に要求する」（遠藤・横森・林 2017：101）という確認要求が、しばしば行われる。一般的に、確認要求は「質問」という行為でなされることが多いが、筆者が収集した会話データの中には、話し手が確認要求を通して「からかい」という行為を達成することもあった。例えば、「なに＋ YNQ（Yes/No Question)」（遠藤・横森・林 2017）や「じゃ」で始まる確認要求の発話、という発話冒頭に特別なマーキングが付いていた事例である。発話の冒頭に特別なマーキングが置かれる場合、発話者は何らかのスタンスを示していると考えられる（Hayashi 2009；平本 2011；串田・林 2015；遠藤・横森・林 2017)。遠藤・横森・林（2017：111）は、「なに＋ YNQ」というフォーマットは、相手の発話において明らかに意図されていないことを（十分な根拠はないが）推論できる内容として提示して確認を求めるという戦略的利用によって、からかい行為を行う際に用いられることがある」と述べている。「からかい」という行為を達成する際に、「じゃ」で始まる確認要求の発話は、「なに」と同様に戦略的に利用されているが、その役割は異なる。そこで、本稿では「じゃ」で始まる確認要求の発話に注目し、「じゃ」の役割を明らかにしながら、なぜその発話が「からかい」として認識可能になるのかを解明する。

2 先行研究

「からかい」に関する研究は、分野[4]、対象者、文脈[5]等様々な観点から行われており、その定義も一様ではない。しかし、それらの定義は互いにまったく異なっているわけではなく、「からかい」が意図的に他者からの反応を引き出そうとする「挑発性（provocativeness)」と、言語的または非言語的に示唆される「遊戯性（playfulness)」という 2 つの要素からなるとする点で共通している（牧 2008)。例えば、牧（2008：271）によれば、「からかい」は「遊戯的なオフレコード・マーカー（off-record marker)[6] を伴った挑発行為」と定義され、Drew（1987）も「からかい」を、遊戯的に相手を揶揄する行為である（the kind of playful humorous jibes）とすると同時に、「からかい」は、先行話者の文句、賞賛や自慢などの行為にみられる「やり過ぎ」や「大げさ」といった特徴に対する懐疑的な態度を表すやり方で行われる、とも述べている（初鹿野・岩田 2014：35)。また、初鹿野・岩田（2014）は、「からかい」のターゲット（対象）となるのは会話に現れる何らかの規範からの逸脱である、とも述べている。

一方、「からかい」は、挑発行為自体の攻撃的意味合いを遊戯的なオフレコード・マーカーによって緩和するという特徴[7]を持つものの、必ずしも遊戯的に解釈されるとは限らず、攻撃的に解釈される可能性も含まれている（牧 2008：271)。つまり、ある発話が「からかい」として認識されるのか否かについては、受け手の応答を分析することも重要であるということである。Drew（1987）は、からかわれる側の真面目な（po-faced）応答について、以下のように述べている。

In a large collection of teases occurring in natural conversations, recipients of teases recurrently respond quite seriously to the teasing proposal. Even where there is evidence that they recognize that the tease was meant humorously, recipients nevertheless usually deny and correct the tease: in only a small minority of cases do they play along with it.

（Drew 1987：219）

最後に、「からかい」を分析する際に、重要な指標の１つとなる笑いに関する研究として、Glenn（2003）がある。特に本稿の事例（4）の分析と深く関わっている点については、Glenn（2003：113）の記述から以下のようにまとめられる。多人数会話の場合、「〜を笑うこと（laughing at)」の環境で、現在の発話者は「笑って良いこと（laughable)」を産出することで、ある参与者を笑いの対象として指名（appoint/nominate）しており、嘲笑、冗談、からかいの加害者（perpetrators）として行動する可能性がある。また、現在の発話者が「第一の笑い（first laugh)」を産出することで他の参与者の笑い（「第二の笑い（second laugh)」）を誘い、「〜と共に笑うこと（laughing with)」ということが達成される。さらに、「第二の笑い（second laugh)」が産出されることで、「〜を笑うこと（laughing at)」の効果があがっている。

３　データ

本稿は４つの事例を分析する。事例１は、九州大学の大学院生である陳力氏が収集した、NHK-BSのテレビ番組『100年インタビュー』[8] における羽生善治（棋士）へのインタビュー会話から抜粋した会話断片[9]である。事例２と３は、The TalkBank Project（McWhinney 2007）にて配布されているSakura コーパスから抜粋した会話断片である。この２つの事例は全て、４人の大学生（H、G：男；K、L：女）が「異性に求める条件」という話題で会話しているものである。事例４は、Kushida（2011：2730-2733）より引用したものである[10]。データのトランスクリプトは、会話分析の分野において標準的な書き起こし記法である Jefferson（2004）に準拠し、若干修正を加えたものである。

４　分　析

Schegloff（2007：73）が述べているように、「ある発話が同じ相手に対してもう１つ別の行為を遂行するための「媒体（vehicle)」になっている場合がある」（串田・平本・林 2017：39)[11]。筆者が扱う事例中に出現する「じゃ」で始まる発話には、「単純な確認要求」として認識されるものと「からかい」として認識される場合があった。そこで、本節では両者の違いを明らかにするために、各事例の分析を行う。以下では、まず、「じゃ」で始まる発話が「単純な確認要求」として遂行されている事例を分析し、その後、「じゃ」で始まる発話が「からかい」を遂行するための確認要求となっている３つの事例を見る。その３つの事例の中で、事例４は事例２、３と比べると異なることから、4.3節で別途分析していく。

４．１　単純な確認要求

事例１は、棋士の羽生善治氏（IE：インタビューを受ける者）に対してのインタビュー会話である。問題となる発話の直前では、IE の７冠制覇の時（25歳）と現在（38歳）との違いが話題になり、現在は７冠達成時に比べ記憶が衰えたということが語られている。注目したいターンは、38行目である。

【事例１】
01 IR:　20代だと思ったの[で(とおっしゃった.)これ]=
02 IE:　　[あ　あ:　は　い.]
03 IR:　=どういう意味でおっしゃったんですか？

((28行省略： IE は IR の質問に答えを与える))
→31 IR: じゃもう今はもう20代でなければ難しい-くもないんではないかと.
32 (0.2)
33 IE: あの::別にその対局するだけ(h)だっ[たら(h)]ですね(h) .huh 取る(h)=
34 IR: [うん_]
35 IE: =のは(h)また(h)別ですよ .huhhuhhu 対局(h)する(h)だけ(h)だったら,
36 まあ.(0.2)今年は実際に一応ずっとこなしてきてこれてるので[:]
37 IR: [え]え.
38 IE: ええ.

まず、インタビューをするもの（以下、IR（interviewer））の質問（01、03行目）に対して、省略した28行で IE が回答を与え、質問－回答の連鎖は31行目までの時点で完結している。その後、「と文末」による理解確認（陳・横森 2017）が産出されている（31行目）。この理解確認は、「じゃ」で始まっているが、それはこの理解確認が直前の発話内容の論理的な必然性を表しているからである。つまり、「今はもう 20 代でなければ難しい ── くもないんではないかと」という理解確認はそれまでの IE の回答に基づき産出されたものである。そして、0.2 秒の沈黙の後、IE は IR の 31 行目の発話が遂行している行為を理解し、説明を与えて IR の理解候補を否定している（33、35、36行目）。つまり、31行目の「じゃ」で始まる発話は単純な確認要求として遂行されていると言える。

４．２ 「からかい」を遂行するための確認要求

本節では、２つの事例を分析する。事例２で分析の焦点となる発話は35、38行目である。

【事例２】((異性に求める条件について話している))
01 H: 気が合えば何でもよい，俺.
02 (1.7)
03 K: 誰でもいい？
04 (0.3)
05 H: 気が合えば.
06 K: hhhh
07 (1.0)
08 G: でもだから，ある程度のさあ,(0.3)見た目は必要でしょ？
10 (0.3)
11 H: まあね .
12 (1.3)
13 K: hhh[hh
14 H: [ある程度の容姿があって，気が合えば,(なん-)誰でも.
16 (0.3)
17 K: °う:ん>うんうん<°((笑みを浮かべている))
18 (0.7)
19 H: 自分の気が許せれば.
20 (0.5)

21 K: [hhh hh hhh]
22 G: [hhh なに気が許せる.]>そういう<性格的に気が (0.4) 許せるならってこと?
23 H: ん.
24 (0.6)
25 G: °うん.°
26 (0.4)
27 K: うん .
28 (0.3)
29 K: 見つかるといいね.
30 (0.2)
31 H: うん.
32 (0.3)
33 K: °うん.°((大きく頷く))
34 H: な[つ休みまでに.]((笑っている))
→35 G: [じゃめっちゃ][さあ, か-][顔は普通ぐらいで] さあ, (0.2)めっ[ちゃ性格]=
36 K: [huhhhh]
37 L: [(h)(咳)(h)] [((咳))]
→38 G: =が合うさあ, デブがい[た(h)ら(h)さ, [hh い(h)いの?h]
39 K: [HHhhh [Hhh
40 L: [Hhhhh hhhh
41 H: デブはいかんな. =
42 G: =Hh[Hhh [hh hhh hh hhhhh
43 [Hhh [hhh hhh hhh
44 L: [hh [hhh hhh hhh hhh
45 H: [デブはいかんな, (0.2)やめよ.hhh

01行目からの展開は次の通りである。まず、H が異性に求める条件について、「気が合えば何でもよい、俺.」という条件を提示すると (01行目)、1.7秒の沈黙 (02行目) の後、K は「誰でもいい?」と質問し懐疑的な態度を示す (03行目)。H は「気が合えば .」という条件を繰り返す (05行目)。その後、G は H の提示した条件に対して「でもだから, ある程度のさあ, (0.3) 見た目は必要でしょ?」(08行目) と「hhh なに気が許せる.>そういう<性格的に気が (0.4) 許せるならってこと?」(22行目) という自分の理解を提示して H に確認を求める。H はそれぞれに対して承認を与える (11、14、23行目)。28行目までで H の提示した「気が合えば何でもよい」という条件についてのやり取りが一旦収束した後、29−34行目は (K と H が構築した) 異性に求める条件からすこしずれた会話が展開される。H の34行目の発話とほとんど同時に G は、「じゃめっちゃさあ, か-顔は普通ぐらいでさあ, (0.2)めっちゃ性格が合うさあ, デブがいた(h)ら(h)さ, hh い(h)いの?h」という発話を産出し、H に確認を求めている (35、38行目)。

この G の発話 (35、38行目) は、それらの位置と特徴から、H に対する「からかい」として認識可能になる。連鎖の位置については、01行目から28行目で H の提示した「気が合えば何でもよい.」(01行目) という条件に関するやり取りがある。このやり取りの中で、H は K と G に何度疑われても「気さえ合えばよい」という条件を繰り返している (05、14、19行目)。Drew (1987) は「から

かい」は参与者が何かを大げさに行う環境で起こると述べている。G の発話（35、38行目）はまさにその環境にあり、「からかい」が可能な位置であると言える。

次に G の発話のデザインの特徴を見てみる。「顔が普通ぐらい」と「性格が合う」という二つの仮定的な条件は、H の一回目（08行目）と二回目（22行目）の確認に対する G の回答から得られたものである。また、二つの仮定的な条件には「めちゃ」という語が加えられた上で、それまでのやり取りでは言及のなかった、H に抵抗される可能性の高い「デブ」（一般的に好ましくない評価）という極端な例をあげ確認を求めている点、さらに、先行発話との論理的な帰結を示す「じゃ」がターン冒頭に置かれている点が特徴的である。「じゃ」の使用により、G の発話はあたかも H の発話に基づいたもの、H の発話の論理的帰結のように聞こえる。こうして G は H の揚げ足を取っているのである。一方、H が笑いながら「デブがいた(h)ら(h)さ，hh い(h)いの?h」を産出したこともそれが「からかい」という行為として認識されることを可能にしている。このような H の発話が結果的に「からかい」として認識されたということは、K と L が大笑という反応を見せたことによって確認される。さらに、H 自身は G の確認要求に対して「デブはいかんな.」と抵抗を示しつつも、K、L 及び自分自身の笑いを産出している（41－45行目）。このように拒絶の反応を参与者間で楽しむことは一種の「からかい」と解釈される（千々岩 2013）。

さらに次の事例 3 を見られたい。この事例では、24行目に注目したい。

【事例 3】((異性に求める条件について話している))

01 H: あと，眼鏡が似合う子.
02 K: hhhh
03 (0.2)
04 G: m:眼鏡？
05 H: え，それ大事，俺.
06 (2.6)
07 H: 眼鏡が似合う子[ね.]((視線：テーブル))
08 L: [ね,]どういう眼鏡が？
09 (0.4)
10 H: どういう？＝
11 L: ＝黒縁とか.
12 (0.7)
13 H: 別になにぶちでもいいよ.
14 K: [Hhhh]
15 L: [なん-ど-][何 で も い い .]
16 G: [ぶちがあったほうがいい( ).]
17 (0.3)
18 L: [(ぶち－)]
19 H: [ぶち]があったほうがいいね.
20 (0.2)
21 G: hhh
22 L: ぶち眼鏡が[似合う人がいい.]
23 H: [(ちゃんとね)/(言っちゃったね)]:.

((視線を H に向ける))　((視線を L へ))

24 K: じゃ，目がいい子と　はだめだね.((にやっと笑っている感じ))
25 L: 残念.　((嬉しそうに話している))
26 H: 別にあれ,［だて眼鏡でも［いい.］
27 G:　［あ，だて眼鏡［でもいい.］
28 K:　［HHh］［hh hh
29 L:　［hhhh

事例 3 の「会話の状況」を見ると、H は会話収録の場で自分が異性に求める条件を真面目に提示しているようには見えない[12]。この直前で G は、他の収録場面で H が「茶髪でセミロング」を異性に求める条件としていたと報告し、全員を笑わせている。その後、H が「あと、眼鏡が似合う子。」(01行目）と加え、それを聞いた K は笑いを産出する（02行目)。つまり、「茶髪でセミロング」、「眼鏡が似合う子」という H が異性に求める条件は K にとっては「笑ってよいこと」(Glenn 2003）だと理解されたわけである。G の「m : 眼鏡 ?」という質問（04行目）に対して H は「え，それ大事，俺.」と強調する（05行目)。ここで、H が異性に求める条件について冗談を言っているように見えるにもかかわらず、「大事」と強調している。こういう行為はやり過ぎだと感じられる。そして眼鏡のタイプについての展開（08－22行目）の後、K は視線を H から L に移しながら「じゃ，目がいい子とはだめだね.」と産出する（24行目)。

「じゃ、目がいい子とはだめだね.」(24行目）という発話の特徴は以下のようである。まず、ターン冒頭におかれた「じゃ」は、先行発話からの論理的な帰結として「目がいい」という推論が導けることを強くマークする。しかし、「目がいい」というのは視力の話であり、H の提示した「眼鏡が似合う」という見た目の話とは直接の関係はない。一方、この発話が産出されている際の K の視線は H から L に移っており、「目がいい子とはだめだね.」という確認が求められている相手は H ではなく L である。そして、K は以上の発話をニヤッと笑っているような表情で産出しているのである。つまり、K は、「目がいい子」という本来 H があげる条件とは無関係なことが H 自身の発話から推論されるということに対し L に同意を求める。このように、目の前にいる参与者に関する発話がその参与者以外に向けて発言されると、その発話は、24行目の発話が示すように、言及対象となる参与者への「からかい」となることが多い（初鹿野・岩田 2008)。そして、K から同意確認を求められた L は25行目で嬉しそうに「残念.」と答える。この発話は、L 自身が H の理想とする女性の条件から外れていることを残念がっていることを示したものである。しかし、「残念」という語とは裏腹に、L はこの発話を嬉しそうに発話していることから、L は K の発話の「遊戯性」を十分理解していることが分かる。一方、H は「別にあれ、だて眼鏡でもいい.」と代案を提示し、「からかい」に対しての抵抗を示す（26行目)。K と L はその反応に対して笑いを返す（28、29行目)。

以上をまとめると、24行目の発話は、H に対する「揚げ足取り」というタイプの「からかい」と

して認識される。

４．３　挑発性を欠いた事例

最後に、以上の２例とは異なる事例を検討する。この事例が先に見た２例と異なるのは、その確認要求の発話から「遊戯性」は感じられるが、「挑発性」は感じられない点である。しかしながら、確認を求められた参与者は、その発話のユーモア性には対応せずに真剣な応答をしている。

事例４[13]は、三人の女子大学生の会話である。注目したいのは、15行目の真紀の発話である。

【事例４】

01 陽子: ふんで:,(0.6)なんかね(0.3)音棟のまえ-(.)あそこねず：っと
02 通ってさ:, ((ここまでは沙織を向いて))
03 (0.2)
04 陽子: 行ったんだけ[ど,]((真紀の方を向いて))
05 沙織: [°あっ°]((ピザの小片を落とし、自分の下を見る))
06 沙織: [°nn°]
07 真紀: [オント]ウとは音楽棟のことかね?
08 陽子: そうそうそう.
09 (0.7)
10 真紀: [ティッシュちょうだい.]
11 沙織: [そうゆうふうに]略すんだね.
12 (0.3)((陽子はティッシュを取ろうと横を向く))
13 真紀: <音棟と> ゆうのか.
14 陽子: (そっ[ち]((沙織の横のティッシュを指しながら))
→15 真紀: [じゃゲイ棟とかゆうんかね」[heh]heh heh]
16 沙織: [ah]hah hah] hah =
17 陽子: [あっ]
18 真紀: [.hhhhhh][AH: HA:H HA:H HA:]H HA:H] .hhh .hhh [.hhh]
19 陽子: [あっちが[う.]
20 沙織: [あれは][ちがうんちゃう.]((金切り声で))
21 陽子: [あっ( )はね:,] [あっ(.)]
22 美術棟はね:,
23 真紀: う[ん.
24 陽子: [じゃ美棟ってゆうんかな::ってね[:,
25 真紀: [う(h)ん.
26 (0.6)
27 陽子: >ゆってた<んやんか.＝でもねい-(.)美術棟はやっぱり美術棟なんだって.
28 (0.3)
29 真紀: khhhh((漏れ笑い))
30 沙織: ゲイ棟じゃないのか(h).[nhuh nh
31 真紀: [ahah hahh
32 陽子: だっ-だから芸術棟じゃないもんあれは.

33 (.)
34 沙織: ふ:ん[美術棟]か？
35 陽子: [美術棟やろ.]
36 陽子: [°うん° 美術棟なの.
37 真紀: [美術しかないんか[あっこは.
38 陽子: [ん:.
39 (1.0)
40 陽子: だからっ,
41 (0.5)
42 沙織: 芸術ゆうたら音楽も入るんちゃう？
43 (0.2)
44 陽子: そ:そ:そそ.
45 (0.4)
46 真紀: ん:ん.
47 (0.5)
48 陽子: (んも)<そうじゃなくっ[て,>
49 沙織: [hh hu hu hu そっ[か.
50 真紀: [huhuhu
51 (0.5)
52 真紀: 話がずれてる[よ.
53 陽子: [うん.
54 沙織: [°うん.°
55 (0.4)
56 陽子: うん ふで:(1.1)そのあたりに来たらねなんか:,(.)

01行目の「音棟」という語は、「音楽棟」[14] の略語である。この略語が陽子のサークルでは使われているのであるが、真紀はそれをよく知らないために07行目で「オントウとは音楽棟のことかね？」と理解の候補を提示し陽子に確認を求めている。つまり、真紀は「音棟」（01行目）という語に対する理解のトラブルに直面し、修復開始を行っている（07行目）。この理解の候補に陽子は「そうそうそう.」と発することによって、確認を与えていると同時に、真紀の援助（assistance）を認めている[15]（08行目）。その後、沙織と真紀は、確認された理解を「ニュース（初めて知った）」として扱うことによって、話題を展開している（11、13行目）。さらに、真紀は、「音楽棟」が「音棟」と略されるのと同じように「芸術棟」は「芸棟（ゲイ棟）」と略すと理解してよいのか否かの確認を求めている（15行目）。

15行目の発話は、以下の特徴を持っている。まず、「じゃ」という語が始まっていることで、先行する陽子に使われている省略規則をターゲットにしている点である。次に、真紀の発した「ゲイ棟」という語の「ゲイ」が「芸」ではなく英単語「gay」を思い起こさせるため、「ゲイ棟」は「同性愛者（の建物）」という意味になっている可能性もある点である。つまり、真紀の当該発話は、陽子の「音楽棟」を「音棟」と省略する方法に従えば、「芸術棟」は「ゲイ棟」になるが、それは、「芸術棟」とはまったく関係ない「gay 棟」を喚起することになるという面白みを込めていると言える。そして、会話参与者である沙織の笑いという反応（16行目）は、15行目の発話が持つ遊戯性の証拠

であると言える。それに対して、陽子は、まず「あっ あっちがう.」と真剣に修正し始め（17、19行目）、真紀が言及する建物は芸術棟ではなく美術棟であるので、その省略規則に従えば「美棟」と呼ぶべきであると主張する（21、22、24行目）。さらに、「>ゆってた<んやんか. でもねい-(.) 美術棟はやっぱり美術棟なんだって」と説明を加えている（27行目）。つまり、陽子が真紀の発話（15行目）に対して真剣に修正を行なっていると言える。こういう応答は Drew（1987）が指摘する「からかい」に対する反応 po-faced 応答と一致している。「からかい」の受け手は、拒否 / 修正というような真面目な（po-faced）応答を通して自らの主張や報告の誠実性（truth）と妥当性（validity）を守る（Drew 1987: 243）。つまり、分析者は15行目の発話からは「挑発性」が感じられないにもかかわらず、会話参与者自身はそれを「からかい」として認識し、真面目な（po-faced）応答をすることで、「からかい」に対して抵抗を示していると言える。

一方、会話分析においてある発話に対して構築した記述の適切性を裏付ける第 2 の方法となるのは、注目する発話の次の位置に置かれた聞き手の発話にどんな理解が示されているかを調べることである（串田・平本・林 2017：63-64）。つまり、陽子の真剣な反応は、陽子が真紀の発話を「からかい」として認識している、且つ処理しているということの証拠になるが、なぜ真紀の発話が「からかい」として認識可能になるのかについての説明にはならない。

しかし、ここで三人が同じ大学に所属しているということに留意されたい。「芸術棟」という建物の名前がないということは、真紀も当然知っているだろう。それにもかかわらず、真紀が「じゃゲイ棟とかゆうんかね」と発話し、陽子に確認を求めるという行為は、意図的に陽子から何らかの反応を引き出そうとする「挑発性」と言ってよいかもしれない。また、15行目で、現在の発話者である真紀は「笑って良いこと（laughable）」を産出することで、陽子を笑いの対象として指名（appoint/nominate）しており、嘲笑、冗談、からかいの加害者（perpetrators）として行動する可能性がある。さらに、現在の発話者である真紀が「第一の笑い（first laugh）」を産出することで沙織の笑い（「第二の笑い（second laugh）」）を誘い、「〜と共に笑うこと（laughing with）」ということが達成されている。また、沙織の「第二の笑い（second laugh）」が産出されることで、「〜を笑うこと（laughing at）」の効果もあがっている。つまり、真紀、沙織は陽子との間に「いわばある種の仲間でありながら、その中に別の関係〈笑う者 / 笑われる者〉が生じる」（團 2013：17）。その証拠は、陽子の真剣な応答に対する真紀と沙織の笑いという反応である（29－31行目、49－50行目）。すなわち、真紀と沙織は陽子の「からかい」への抵抗を楽しんでいるのである。

4.4 考 察

本節では、「じゃ」で始まる発話が単純な確認要求として遂行されている事例と、「からかい」を遂行するための確認要求の事例となっているものとを比較しながら考察していく。「じゃ」で始まる発話が単純な確認要求として遂行されている事例との比較を通して、「じゃ」で始まる発話が「からかい」を遂行するための確認要求となっている事例の特徴を明らかにしていく。

まず、本稿で扱った 4 つの事例とも先行するターンをターゲットにし、話者はそれに対して確認を求めていた。しかしながら、事例 1 における確認要求の発話は次ターンで相手の返答を得ることを主たる目的とするという行為を遂行しており「からかい」にはなっていないのに対して、事例 2、3、4 はそもそも確認を得ること自体が目的ではなく、相手を返答に窮する状態に至らしめて周囲の参与者からの笑いを誘う（遠藤・横森・林 2017：112）ことを目的としており、それがこれらの事例を「からかい」として解釈させる所以である。

次に、「からかい」として解釈される事例 2、3 と事例 4 の相違については、以下のように考えら

れる。事例２、３の「からかい」を遂行していた確認要求発話は、先行する発話への疑義として提示されていた。これは、Drew（1987: 243）が論じる「からかい」は先行発話に現れた不平、賞賛、自慢、あるいはあまりにも真剣ではないことに対する懐疑的な意見を示唆するようなやり方である、と一致している。一方、事例４では、先行発話から産出される推論、即ち Glenn（2003: 113）の言う「笑って良いこと（laughable）」を産出することで、「からかい」を行う。先行発話から推論された語がもつ曖昧性・両義性、その両義間のギャップをターゲットとして「からかい」を遂行しているのである。事例２、３とは異なり、先行話者の発話自体ではなく、推論によって偶然導かれた語の曖昧性をからかっているため、遊戯性はあるものの先行話者に対する挑発性は少ない。

最後に、「じゃ」という語が何故「からかい」に用いられるのであろうか。「じゃ」という語は、一般に「前に述べた事柄を理由・根拠として次に述べる事柄が導かれることを示す」[16]。この語を、「先行発話に度を越した文句や賞賛、間違いなど、「からかわれうる」特性がある」（Drew 2013: 6）環境で用いることで、自分の発話は「からかわれうる特性をもつ」先行発話を根拠として論理的に導かれた事項であるとしながら、発話に現れている攻撃性に関する責任を回避していると考えられる。

５　おわりに

相互行為を通じて円滑な社会生活を営むために、人々はお互いに何をしているのかそのつど理解できなければならない。また、他者が理解できるような形で行為を構成することができなければならない（串田・平本・林 2017：29）。本稿では、「じゃ」で始まる確認要求を用いた発話に着目し、その発話がなぜ「からかい」として認識可能になるかを、会話分析により説明した。

その結果、まず、「からかい」と思われる発話は、Drew（1987）が指摘する「先行発話に度を越した文句や賞賛、間違いなど、「からかわれうる」特性がある」（團 2013：6）という「からかい」が起こりやすい環境で出現したことが確認された。また、相手の発話の揚げ足を取り、相手に抵抗される可能性が高いものを「じゃ」で導入し、その確認を求めることを通して、「先行する発話に対するある種の懐疑的な態度」、すなわち、「からかい」を構成する要素のひとつ「挑発性」が示される。さらに、当該発話全体は「遊戯的なオフレコード・マーカー」を伴っており、前述の「挑発性」とこの「遊戯性」が合わさることにより「からかい」という行為が遂行されることになる。このとき、当該発話の冒頭に置かれ、相手の先行発話との論理的な帰結を示す「じゃ」は、当該発話の攻撃性を緩和するという働きをすることになる。

注

1　九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程３年

2　行為の構成という問題にアプローチするとき、会話分析の基本的視点は、行為が刻一刻変化する状況によって形づくられ、同時に、それ自身もまた状況を新たに形づくっていく、という見方である（串田・平本・林 2017：30）。

3　行為がどのように構成されるのかを厳密に且つ形式的に記述しようとしたとき、行為は「位置」と「組み立て」によって構成されるという、会話分析の中心的な考え方が出てくる。この考え方を端的に表すのが「なぜいまそれを（Why that now）?」である。私たちがなんらかの行為をするときには、もし「なぜいまそれをするのか」と問われた際に説明できるように振る舞っている。相手の行為を理解するときも、「なぜ相手はいまそれをしたのか」を参照して理解してい

る。要するに、特定の行為は、特定の位置（＝いま）で特定の組み立ての振る舞い（それ）がなされることで、特定の行為が認識可能になるのである（串田・平本・林 2017：33)。

4 心理学をはじめ人類学、社会学など様々な分野において研究が行われてきた（牧 2008：270)。

5 親子間、兄弟間、友だち同士、恋人同士の相互作用だけでなく、母子間の遊び場面、子供しつけ場面、小学校での遊び場面、葛藤解決場面や恋人同士の会話場面、さらにいじめ場面など、多様な文脈で研究が行われてきた（牧 2008：270)。

6 オフレコード・マーカー（off-record marker）は、例えば、大げさな表情、相手のまね、ウィンク、笑い声、語調やトーンの変化などを指す。

7 牧（2008：217）によれば、この特徴は「多義性（ambiguity)」と呼ばれ、「からかい」の重要な要素の１つと考えられる。

8 『100年インタビュー』という番組は、NHK アーカイブズ学術利用・関西トライアル2018年度第１回に採用された陳力氏の研究計画に基づき、特別に許可を得て閲覧したアーカイブ番組である。

9 抜粋した会話断片は、陳力氏がトランスクリプトに起こしたものであり、使用許可を得たものである。

10 Kushida（2011）は英語で書かれたものであり、本稿における日本語バージョンの会話断片は、串田秀也氏から得たものである。また、本稿の都合でトランスクリプトの行番号を変えた。

11 串田・平本・林（2017：33-39）の事例（3）のカスミの「何時におやつなん :: ん ?」（07行目）が１つの例である。

01 ユリエ： 言うた. ((シンサクに向かって))
02 カスミ： ユリエ先生::[:.
03 ユリエ： [言うた. >先生聞こえたよ<. ((シンサクに向かって))
04 カスミ： ユリエ先生::::.
05 ユリエ： はん ?
06 (1.9) ((ユリエ先生は背後にいるナオキの方を一瞬振り向いたあと、
カスミの声のした方に顔を上げる))
07 カスミ： → 何時におやつな::ん ? =
08 ユリエ： =いま何時::?
09 カスミ： ↓ええ : 3 ::時ごろ.
10 (1.8) ((ユリエ先生は考えている表情))
11 ユリエ： まだ. 3時半ごろにするわ.
12 (1.3) ((ユリエ先生はふたたび１年生に向き直る))

07行目の発話は言語形式としては質問になっているのが、それはおやつの催促をしているに他ならない。つまり、カスミの最終目的は、おやつの時間についての情報を得ることではなく、早くおやつにしてもらうことにある。

12 実際、筆者は、H が「真面目に異性に求める条件を提示しているように見えない」というより「ふざけているように見える」や「冗談を言っているように見える」のほうがもっと適切だと思われる。

13 Kushida（2011: 2730-2734）における記述に基づき、筆者の分析を加えた。

14 キャンパス内の特定の建物を指している。

15 陽子は01行目で発話の産出トラブルに直面していていないが、真紀の理解候補（07行目）によって、自分の発話が受け手に合わせたデザイン（recipient design）ではないということが分かっていることから、真紀の理解候補は陽子にとって一種の「援助（assistance)」となる。具体的な記述は、Kushida（2011: 2744）を参照されたい。

16 大辞林第三版：https://kotobank.jp/word/ では -576596（2017年 9 月 1 日アクセス）

参 考 文 献

遠藤智子・横森大輔・林誠（2017）.「確認要求に用いられる感動詞的用法の「なに」── 認識的スタンス標識の相互行為上の働き ──」『社会言語科学』20 (1), 100-114, 社会言語科学会.

伊藤翼斗 (2013).「日本語の発話冒頭における言語要素の研究：相互行為から見る冒頭要素の順序」大阪大学大学院言語文化研究科, 博士論文.

串田秀也・平本毅・林誠（2017）.『会話分析入門』. 勁草書房.

串田秀也・林 誠（2015）.「WH 質問への抵抗 ── 感動詞「いや」の相互行為上の働き」友定賢治（編）『感動詞の言語学』東京 : ひつじ書房, 169-211.

團康晃（2013）.「指導と結びつきうる「からかい」──「いじり」の相互行為分析 ──」『ソシオロジ』58（2), 3-19, 社会学研究会.

千々岩宏晃（2013）.「「からかい」の相互行為的達成 :「あなたに関する知識」を用いた発話の一用法」『日本語・日本文化研究』23, 129-141.

陳力・横森大輔（2017）.「会話における「と文末」を用いた理解確認」『社会言語科学会第40回大会発表論文集』, 40-43.

初鹿野阿れ・岩田夏穂 (2008).「選ばれていない参加者が発話するとき ── もう一人の参加者について言及すること ──」『社会言語科学』10 (2), 121-134.

初鹿野阿れ・岩田夏穂（2014）.「話の展開のやり方をターゲットとして「からかい」の分析」『社会言語科学会第34回大会発表論文集』, 34-37.

平本毅（2011）.「発話ターン開始部に置かれる「なんか」の話者性の「弱さ」について」『社会言語科学』14 (1), 198-209, 社会言語科学会.

平本毅（2015),「「絶句」の会話分析」『立命館産業社会論集』第51巻第 1 号, 239-254.

牧亮太 (2008).「からかい行動（teasing）に関する研究の動向と課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』 3 (57), 269-276.

横森大輔 (2013).「相互行為の中の文法 ── 日本語会話における副詞節構文の創発と秩序 ──」京都大学大学院人間・環境学研究科, 博士論文 .

Drew, Paul. (1987). Po-face receipt of teases, *Linguistics*, 25, 219-253.

Glenn, Phillip. (2003). *Laughter in Interaction*, Cambridge: Cambridge University Press.

Hayashi, Makoto. (2009) Marking a 'noticing of departure' in talk: Eh-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 41 (10), 2100-2129.

Kushida, Shuya. (2011). Confirming understanding and acknowledging assistance: Managing trouble responsibility in response to understanding check in Japanese talk-in-interaction. *Journal of Pragmatics* 43, 2716-2739.

MacWhinney, Brian. (2007). The TalkBank Project in Joan C. Beal, Karen P. Corrigan and Hermann L. Moisl (eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases*, Vol.1. Houndmills:

Palgrave-Mecmillan, 163-180.
Jefferson, Gail. (2004). A Technique for Inviting Laughter and Its Subsequent Acceptance Declination. in G.Psathas (ed.). *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*. New York: Irvington, 79-96.
Schegloff, Emanuel A. (2007). *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis1*. Cambridge: Cambridge University Press.

記号一覧

(.)	0.2秒未満の沈黙
(秒数)	沈黙の秒数
.h	吸気音
h	呼気音（笑い声も含む）
文(h)字	笑いながら発話する
°文字°	音が小さい
(文字)	聞き取りが不可能な箇所
<文字>	発話の速度がゆっくり
>文字<	発話の速度が速い
文字	強い音調で産出された語句
文字.	下降調の抑揚
文字 _	平板調の抑揚
文字?	上昇調の抑揚
文字,	発話がまだ続くように聞こえる抑揚
文字-	直前の発話や語が中断された場合
文字:	音の引き伸ばし
文字ↂ	やや尻上がりの抑揚
=	前後が途切れなく続く
[	重複発話の開始点
]	重複発話の終了点
((文字))	注釈や説明
→文字	分析の焦点

How is an Utterance Recognized as Teasing?:

Focusing on the Confirmation Requests Prefaced with the Japanese Conjunction “ja”

Qingqing WU and Yoshiko MATSUMURA

Confirmation requests are often made in conversation. Generally speaking, they are made in the form of questioning. However, there are some cases in which they perform the act of “teasing.” This paper focuses on the confirmation requests prefaced with the Japanese conjunction “ja”, and investigates how the utterance can be recognized as “teasing” by using the method of conversation analysis. The following results can be revealed. Firstly, when a tease is recognizable, the purpose of the confirmation request is not to request the confirmation of the preceding utterance but to cause other participants’ laughter. Secondly, when a speaker performs the act of teasing with the confirmation request, s/he ordinarily holds a doubt on the preceding utterance. This is consistent with Drew’s (1987) theory that “teasing” is completed through another speaker expressing a skeptical attitude towards that assertion in the next turn, in which the preceding speaker is felt overdoing. Additionally, in an exceptional case, teasing can also be achieved by producing “laughable” thing through targeting the turn of the preceding speaker.